

初等中等教育段階における 生成AIの利活用について

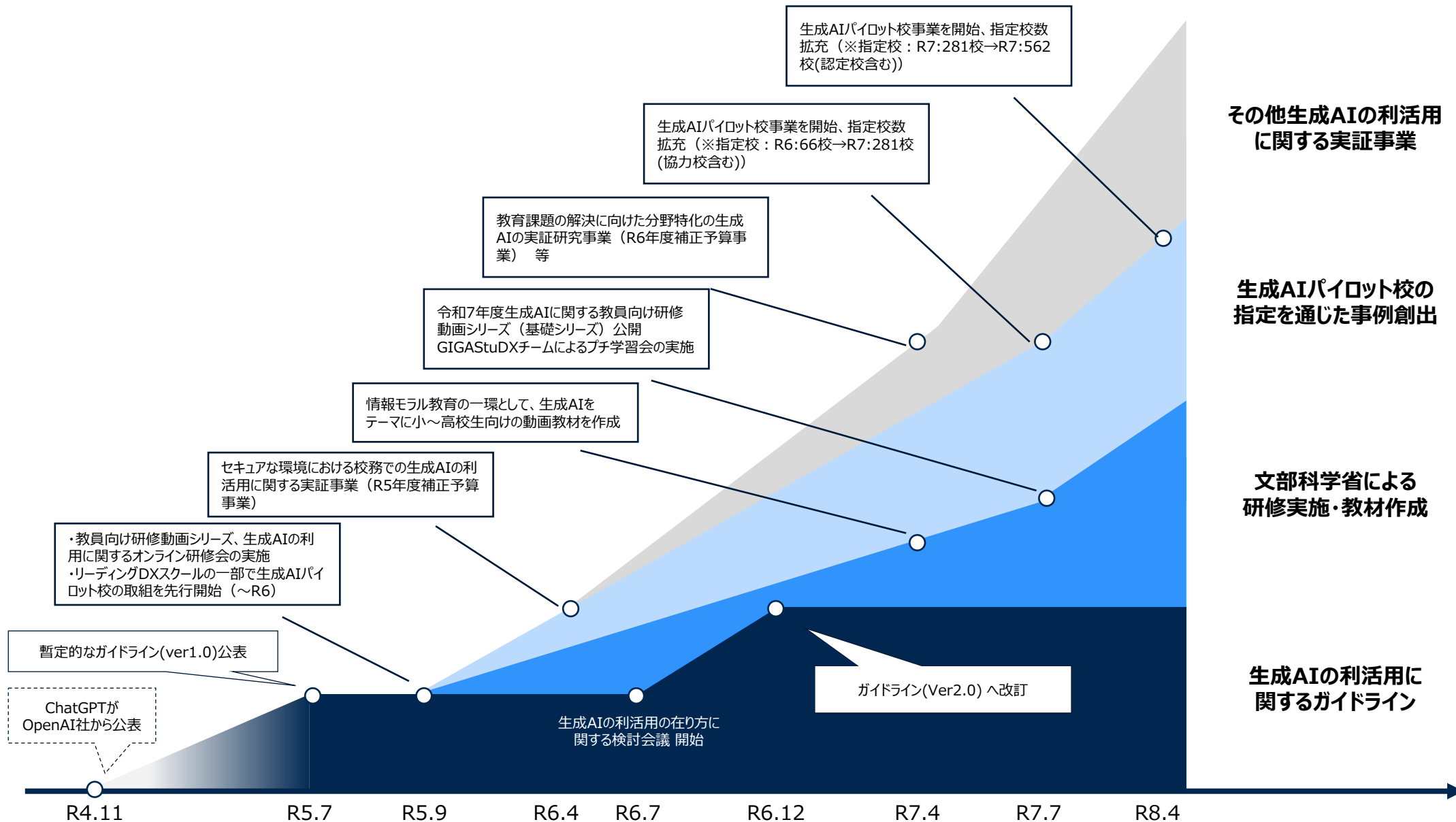
令和8年8月6日

初等中等教育局参事官（デジタル学習基盤担当）付

先端技術活用推進係長 伊勢本惇示

生成AIの利活用に関する文部科学省のこれまでの取組

生成AIはこの数年で急速に進化した先端技術であるが、様々なリスクも存在。
初等中等教育段階において生成AIの適切な利活用に向けて、ガイドライン策定など取組を実施。



初等中等教育段階における生成AIの利活用に関する検討会議

(2024年12月20日)(第7回) 石川座長御発言

……(略)…… 少しでも高所からの議論をさせていただくと、生成AIもそうなんですけれども、現在の科学技術の進歩というのは激しいので、科学技術が社会の変革を牽引する時代になったと思っています。その新しい科学技術とその適用に関しては、本来であれば、その科学技術のある程度の理解と適用分野の本質的な理解というのが前提であるはずなのですが、世の中の議論の一部は、どうも影響のみを議論するということに陥っていて、そうではなくて、きちんとした本質の議論、技術の本質を、適用分野の状況の本質の議論が前提となった議論がすべきであると常々思っておりました。このガイドラインの策定に当たっては、それがきちんとできたというのが、私としては、よかった点ではないかと思っています。

新しい科学技術の適用に関しては、科学技術の理解をきちんとやった上で議論できるというのが、日本の国の国力を上げることに非常に重要なことだと思っております。今回の生成AIもその方向で議論が、この場だけに限らず、いろいろな場面で、その方向で議論されることを願っております。

今回まとめたガイドラインが各現場あるいは教育委員会等でうまく活用されて、きちんとした技術の理解と教育の本質の理解の下に活用されることを強く願っております。

本日の流れ

- 生成AIの利活用に関するガイドライン
- 生成AIパイロット校の取組
- 背景や最近の議論の動向

初等中等教育段階における生成AIの利活用に関するガイドライン(Ver.2.0)

教職員や教育委員会等の学校教育関係者を主たる読み手として、学校現場における生成AIの適切な利活用を実現するための参考資料となるよう、生成AIの概要や基本的な考え方、場面や主体に応じて押さえておくべきポイントをまとめたもの。令和5年7月に暫定的なガイドライン(Ver.1.0)を公表し、令和6年12月にガイドライン(Ver.2.0)へと改訂。

ガイドラインの構成

① はじめに（本ガイドラインの位置づけ及び構成）

① 生成 AI について

② 基本的な考え方

- 1 人間中心の生成AIの利活用
- 2 情報活用能力の育成強化

政府全体の議論
に合わせて内容や
考え方を整理



③ 学校現場において押さえておくべきポイント

- 教職員が校務で利活用する場面
- 児童生徒が学習活動で利活用する場面
- 教育委員会が押さえておくべきポイント



ガイドライン参考資料

- 各場面や主体に応じたチェック項目
- 生成AIパイロット校における先行取組事例
- 学校現場で活用可能な研修教材 等

初等中等教育段階における
生成 AI の利活用に関するガイドライン

場面や主体に応じて
ポイントを整理

文部科学省 初等中等教育局

令和6年12月26日

Ver. 2.0

令和6年12月26日にVer.2.0公表



1. 生成AIについて

生成AIについて	基本的な考え方		押さえておくべきポイント				参考資料
	人間中心	情報活用能力	共通	教職員	児童生徒	教育委員会	

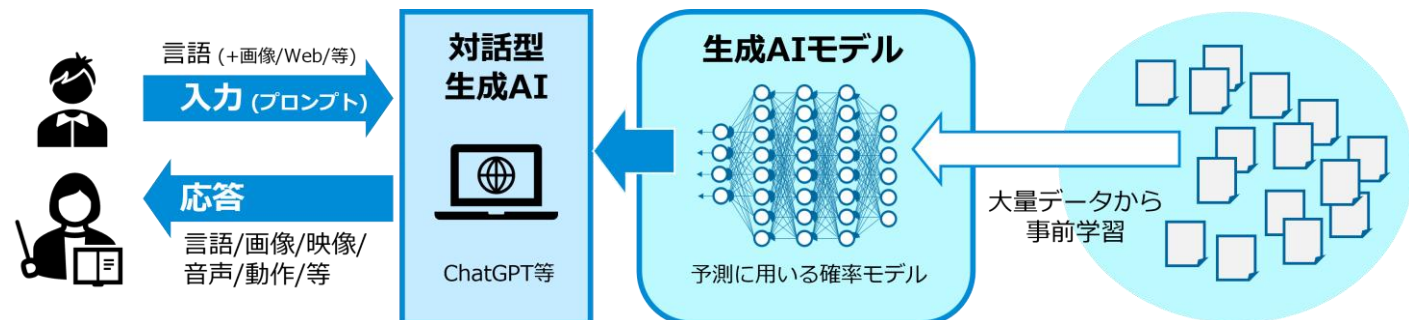
生成AIの概要



基本的な仕組みの理解

- 生成AIは急速に普及し、文章だけでなく動画像や音声等、異なる種類の情報をまとめて扱えるようになり、人間の反応と遜色ないスピードで応答ができるようになっている。
- 学校現場においても、汎用的なサービスが利用可能なだけでなく、標準仕様のブラウザや学習支援ソフトウェア等にも組み込まれ、利活用の幅が広がりつつある。
- 誤った出力（ハルシネーション）を完全に防ぐことは難しいとされているほか、学習過程・出力過程の信頼性・透明性への懸念、大量のデータに潜む偏見や差別等のバイアスをそのまま再生成することなど、様々なリスクも指摘されている。一方で、これらのリスクを軽減する技術等も進展している。

生成AIの仕組み



JST研究開発戦略センター「人工知能研究の新潮流2 ～基盤モデル・生成AIのインパクト～」(2023年7月)を基に文部科学省において作成

2. 基本的な考え方 – 人間中心の利活用

生成AI について	基本的な考え方		押さえておくべきポイント					参考 資料
	人間中心	情報活用 能力	共通	教職 員	児童 生徒	教育 委員会		

人間中心の原則



- 生成AIは人間の能力を補助、拡張し、可能性を広げてくれる有用な道具になり得るものと捉えるべきである。
- その上で、出力はあくまでも「参考の一つである」ことを認識するとともに、リスクや懸念を踏まえつつ、最後は人間が判断し、責任を持つことが重要である。

児童生徒の学びと生成AI



- 学習指導要領に示す資質・能力の育成に寄与するか、教育活動の目的を達成する観点から効果的であるかを吟味した上で利活用すべきであり、生成AIを利活用することが目的であってはならない。

教師の役割と生成AI



- 指導計画や学習環境の設定、丁寧な見取りと支援といった、学びの専門職としての教師の役割は、より重要なものになる。
- 生成AIの仕組みや特徴を理解するなど、教師には一定のAIリテラシーを身に付けることが求められる。

2. 基本的な考え方 - 情報活用能力の育成強化

生成AI について	基本的な考え方		押さえておくべきポイント				参考 資料
	人間中心	情報活用 能力	共通	教職 員	児童 生徒	教育 委員会	

学習の基盤となる資質・能力 としての情報活用能力



- 学習指導要領では、「情報活用能力」を学習の基盤となる資質・能力として位置付け、情報を主体的に捉え、活用すること、情報技術を学習や日常生活に活用できるようにすることの重要性を強調している。
- 各学校においては、教科等横断的な視点からの教育課程の編成を通じて、各教科等の学習の過程における指導の中で情報活用能力を育成することが期待される。

情報活用能力の 育成強化



- 生成AIの仕組みの理解、学びに生かしていく視点、近い将来生成AIを使いこなすための力を、各教科等の中において意識的に育てていく姿勢は重要である。
- 生成AIが社会生活に組み込まれていくことを念頭に、発達の段階等を踏まえつつ、情報モラルを含む情報活用能力の育成を充実させていくことが必要である。

3. 学校現場において共通して押さえておくべきポイント

生成AI について	基本的な考え方		押さえておくべきポイント				参考 資料
	人間中心	情報活用 能力	共通	教職 員	児童 生徒	教育 委員会	



安全性を考慮した適正利用



情報セキュリティの確保



個人情報・プライバシー
著作権の保護



公平性の確保



透明性の確保、
関係者への説明責任

3. 学校現場において押さえておくべきポイント

- 校務の効率化や質の向上等、働き方改革につなげていくことが期待される
- 新たな技術に慣れ親しみ、利便性や懸念点を知っておくことは、児童生徒の学びをより高度化する観点からも重要
- 内容の適切性を判断できる範囲内で積極的に利活用することは有用

教職員の校務



具体的な利活用場面

- 児童生徒の指導にかかわる業務への支援
- 学校の運営にかかわる業務への支援
- 外部対応への支援

利活用の際のポイント

- AIサービスの**最新の利用規約を確認・遵守**する
- 原則、**重要性の高い成績情報等を入力しない**
- **個人情報保護法等を遵守**すること、**著作権侵害につながるような使い方をしないこと**
- バイアス等の生成AIの特徴を理解した上で、出力された内容を**採用するかどうかは必ず教職員が判断**する
- 管理職は**適切な利活用がなされているかを確認**する

3. 学校現場において押さえておくべきポイント

児童生徒の学習活動



具体的な活用場面

- 発達の段階や情報活用能力の育成状況に留意しつつ、**リスクや懸念に対策を講じた上で利活用を検討**すべき
- その際、学習指導要領に定める資質・能力の育成に寄与するか、**教育活動の目的を達成する観点から効果的であるかを吟味**することが必要

- 情報モラル教育の一環として、生成AIが生成する誤りを含む出力を教材に、その性質や限界に気付く
- グループの考えをまとめる、アイデアを出す活動の途中段階で、一定の議論やまとめをした上で、足りない視点を見つけ議論を深める目的で活用する
- 英会話の相手として活用したり、より自然な英語表現への改善や一人一人の興味関心に応じた単語リストや例文リストの作成に活用したりする
- プログラミングの授業において、児童生徒のアイデアを実現するためのプログラムの制作に活用する 等

利活用の際のポイント

- 年齢制限等の**最新の利用規約を確認・遵守**し、**教師の適切な指導監督の下で利活用**させること
- **教育情報セキュリティポリシーや教育情報セキュリティ管理者の指示等を遵守**すること
- 氏名や写真等の**個人情報を入力させないこと**、**著作権侵害につながるような使い方をさせないこと**
- **出力に偏りがないか**等、教育目的に照らして適切かを**教師が随時判断**すること
- **保護者**に対し、**利用目的や様態等の情報提供**が重要

利活用の適否の判断に際しては、学習指導要領に示す資質・能力の育成につながるか、教育活動の目的を達成する観点で効果的であるかを吟味する必要がある。



児童生徒にハルシネーションやバイアス等の生成AIの基本的な仕組みや特徴を理解させたうえで、



生成AIに全てを委ねるのではなく自己の判断や考えが重要であることを十分に認識させられるか



適正な評価の阻害や不正行為に繋がらないか



**生成AIの出力を基に深い意味理解を促し、思考力を高める
使い方をできるか**

など

発達段階や各教科等における学習の状況等を含む児童生徒の実態を踏まえ、そうした教育活動が可能であるかどうかの見極めが重要。

なお、学習課題やテストの内容によっては、児童生徒が生成AIを用いることで簡単にこなせる可能性があることも前提に、課題の内容等を吟味することや、問題の本質を問うこと、深い意味理解を促すことを重視した授業づくりを行うことも期待される。

3. 学校現場において押さえておくべきポイント

- 教育委員会が主導して制度設計や利活用の方向性を示すことが重要
- 各学校の実態を十分に踏まえた柔軟な対応を講じることが必要であり、一律に禁止・義務付けるなどの硬直的な運用は望ましくない
- 先行事例や教材・ノウハウの周知・共有、効果的な活用を促進する研修の実施により、生成AIの適切な利活用を推進する環境を整備することが必要

教育委員会等



適切な利活用のために考慮すべきポイント

- 各学校が適切に生成AIの利活用を行えるよう各学校の実態を十分に踏まえた柔軟な対応を講じることが必要
- 教育現場の実態に即した教育情報セキュリティポリシーを教育委員会が策定、必要に応じて見直すことが重要
- 個人情報の取扱いに関して必要かつ適切な措置が取られているか確認すること。著作権の侵害リスクを低減するため、適切な予防措置を講じているモデルやサービスを選択することも考えられる
- バイアス等のリスクや懸念を踏まえた教職員による最終的な判断が不可欠であることなど、適切な情報提供や研修等のサポートを行うことができるよう、体制の整備や知見の収集に努めることが重要
- 生成AIサービスを導入する際は、保護者の経済的な負担等に十分に配慮しつつ、適切な利活用を実現するための研修を実施するなど、丁寧な情報提供を行うことが必要

利活用する際のチェック項目

教職員の校務

- 教育委員会の方針（情報セキュリティに関するルール・指示等も含む）に基づき利用しているか
- 業務端末又は教育情報セキュリティ管理者の許可を得た端末を利用しているか
- 生成AIサービスの提供者が定める最新の利用規約を確認・遵守しているか
- ハルシネーションやバイアス等の生成AIの特徴を理解した上で、出力結果の適切性を判断できる範囲内で利用し、出力された内容を採用するかどうかを自身で判断しているか
- プロンプトに重要性の高い成績情報等の情報を入力していないか
※重要性の高い情報を扱う前提のセキュリティ対策が講じられている場合は除く（ただし、重要性の高い情報のうち個人情報に該当する情報については、以下「プロンプトに個人情報を入力していないか」についても留意する必要がある。）
- プロンプトに個人情報を入力していないか
※教職員がプロンプトに入力した個人情報を、生成AIの提供者において応答結果の出力以外の目的で取り扱わないことを確認している場合は除く
- 著作権の侵害につながるような使い方をしていないか

児童生徒の学習活動

- 教育活動の目的を達成する観点で効果的であることを確認しているか
- 児童生徒の発達の段階や情報活用能力の育成状況に十分留意しているか
- 生成AIの性質やメリット・デメリット、情報の真偽を確かめる、自己の判断や考えが重要であることを十分に認識できるような使い方等に関する学習を実施しているか
- プロンプトに氏名や写真等の個人情報を入力しないよう十分な指導を行っているか
- 著作権の侵害につながるような使い方をしないよう十分に指導しているか
- 生成AIサービスの提供者が定める最新の利用規約を確認・遵守しているか（年齢制限や保護者の同意の必要性、生成物のライセンスの所在など）
- 生成AIによる生成物をそのまま自己の成果物として使用することは自分のためにならないこと、使用方法によっては不適切又は不正な行為になることを十分に指導しているか。
- 学習課題に生成AIの回答を引用している場合、出典・引用を記載することを理解させているか
- 保護者の経済的負担に十分に配慮して生成AIツールを選択しているか
- 児童生徒が学校外で生成AIを利活用する可能性も踏まえ、生成AIの不適切な利活用が行われないう、保護者に対し周知し、理解を得ているか

生成AIパイロット校における先行取組事例



「教職員による校務での利活用例」や「学習場面において利活用が考えられる例」に即した生成AIパイロット校の先行取組事例を掲載している。

学校現場で活用可能な研修教材等



文部科学省等が実施してきた研修（アーカイブ公開含む）や利用可能なコンテンツ等の例を掲載している。

本日の流れ

- 利活用ガイドライン
- 文部科学省における実証的な取組
- 最近の議論の動向やその背景

令和8年度生成AIパイロット校の取組について

背景・課題

- 令和5年度よりリーディングDXスクール事業の一環として、**生成 AI を教職員が校務において活用する実践例**や**児童生徒が学習場面で利活用する実践例**が全国から生まれてきており、令和8年度も引き続きその取組を一層深めていく必要がある。
- そのため、「**初等中等教育段階における生成 AI の利活用に関するガイドライン（令和6年12月26日）**」を遵守し、学校現場における生成 AI の適切な利活用の実践事例を創出し、その**成果・課題の検証、好事例の創出・普及を行うこと**が必要である。併せて、次期学習指導要領の改訂を見据え、**AIを含む情報活用能力の育成に向けた教材の実践及び実証**を行うことが必要である。

取組内容

A区分：教育利用 10自治体

学習場面における生成AIの利活用事例創出

情報活用能力育成の一環として、生成AIを児童生徒の学習場面で活用する取り組みについて以下の場面で意識して実践を創出

- 生成AI自体を学ぶ場面
- 使い方を学ぶ場面
- 各教科の学びにおいて積極的に用いる場面

B区分：校務利用 100自治体

校務における生成AIの利活用事例創出

教職員の働き方改革の一環として、生成AIを日々の校務に活用し、業務改善を行う取り組み実践を創出

- 児童生徒の指導に関わる業務の支援
- 学校運営に関わる業務の支援
- 外部対応への支援 など

C区分：教材実証 51自治体

AIを含む情報活用能力の育成に向けた教材実証

- 指導要領改訂を見据え、別事業において開発するAIを含む情報活用能力育成に向けた教材の活用実証
- 各教科などにおける深い学び・情報活用能力育成の実践事例を創出（リーディングDXスクール事業の後継）

5つの機会

①キックオフ会議

- 有識者による基調講演
- パネルディスカッション

基調講演やパネルディスカッションを通して、1年間を通して各学校が探求する【問い】を考える場を提供

②夏季学習会

（※内容については令和7年度実績例）

- 有識者による基調講演
- アイデアソン、ワークショップ



対面イベントで実践を共有

③オンライン座談会

- パイロット校の横のつながりをつくる座談会

生成AIの利活用や情報活用能力の育成について、教員同士の悩みや実践を**共有する場を作ることで**、取組を進める教員・教育委員会をサポート

④全国キャラバン

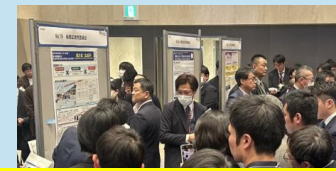
- 生成AIの利活用を普及展開するための研修パッケージ体験

取組が一部の教員だけにとどまらないよう、普及展開に必要な研修パッケージを体験。各校に持ち帰り実践することでさらなる普及展開を目指す。

⑤成果報告会

（※内容については令和7年度実績例）

- 基調講演
- ポスターセッション



各校の実践をポスターで共有

令和8年度生成AIパイロット校について

R8年度はA区分：教育利用**10**自治体・**33**校（+認定校**74**校）

B区分：校務利用**100**自治体・**261**校（+認定校**16**校）

C区分：教材実証**51**自治体・**146**校（+認定校**32**校）

を生成AIパイロット校として指定し、令和8年度も引き続き成果・課題を検証。

※区分間での重複あり。ユニークでは149自治体、478校（認定校も含む）

都道府県	教育委員会名	都道府県	教育委員会名	都道府県	教育委員会名	都道府県	教育委員会名	都道府県	教育委員会名
北海道	北海道教育委員会	東京都	千代田区教育委員会	愛知県	春日井市教育委員会	奈良県	奈良県教育委員会	福岡県	北九州市教育委員会
	札幌市教育委員会		板橋区教育委員会		愛知県教育委員会		奈良市教育委員会		福岡市教育委員会
	長沼町教育委員会		八丈町教育委員会		知多市教育委員会		橿原市教育委員会	佐賀県	武雄市教育委員会
青森県	青森県教育委員会		調布市教育委員会		名古屋市教育委員会	和歌山県	海南市教育委員会	長崎県	佐世保市教育委員会
宮城県	仙台市教育委員会	神奈川県	相模原市教育委員会		一宮市教育委員会		田辺市教育委員会		東彼杵町教育委員会
山形県	小国町教育委員会		開成町教育委員会	三重県	四日市市教育委員会		和歌山県教育委員会	熊本県	熊本県教育委員会
福島県	福島県教育委員会	新潟県	新潟市教育委員会		鈴鹿市教育委員会		岩出市教育委員会		熊本市教育委員会
茨城県	かすみがうら市教育委員会		長岡市教育委員会	滋賀県	湖南市教育委員会	鳥取県	鳥取県教育委員会		天草市教育委員会
	那珂市教育委員会		加茂市教育委員会		京都府教育委員会	島根県	島根県教育委員会		高森町教育委員会
栃木県	宇都宮市教育委員会	富山県	朝日町教育委員会	京都府	京都市教育委員会	岡山県	岡山県教育委員会		阿蘇市教育委員会
群馬県	吉岡町教育委員会		富山県教育委員会		京丹波町教育委員会		岡山市教育委員会		山江村教育委員会
埼玉県	埼玉県教育委員会	石川県	石川県教育委員会	大阪府	大阪府教育委員会	広島県	矢掛町教育委員会	大分県	玖珠町教育委員会
	さいたま市教育委員会		能美市教育委員会		堺市教育委員会		広島市教育委員会		都城市教育委員会
	久喜市教育委員会	福井県	福井県教育委員会		貝塚市教育委員会	山口県	山陽小野田市教育委員会	宮崎県	日南市教育委員会
	幸手市教育委員会		あわら市教育委員会		摂津市教育委員会		東みよし町教育委員会		西米良村教育委員会
	所沢市教育委員会		坂井市教育委員会	兵庫県	東大阪市教育委員会	徳島県	徳島県教育委員会	鹿児島県	鹿児島県教育委員会
	川口市教育委員会	長野県	小川村教育委員会		兵庫県教育委員会		多度津町教育委員会		大和村教育委員会
千葉県	我孫子市教育委員会		長野県教育委員会		姫路市教育委員会	香川県	四国中央市教育委員会		霧島市教育委員会
	印西市教育委員会		喬木村教育委員会		洲本市教育委員会		香美市教育委員会	沖縄県	沖縄市教育委員会
	船橋市教育委員会	静岡県	牧之原市教育委員会		西脇市教育委員会	高知県	本山町教育委員会		嘉手納町教育委員会
	松戸市教育委員会		吉田町教育委員会		丹波篠山市教育委員会		高知市教育委員会		石垣市教育委員会
	八千代市教育委員会								北谷町教育委員会

※上記は認定校のみの自治体も含む
※3月31日時点で公表可能な自治体のみ掲載

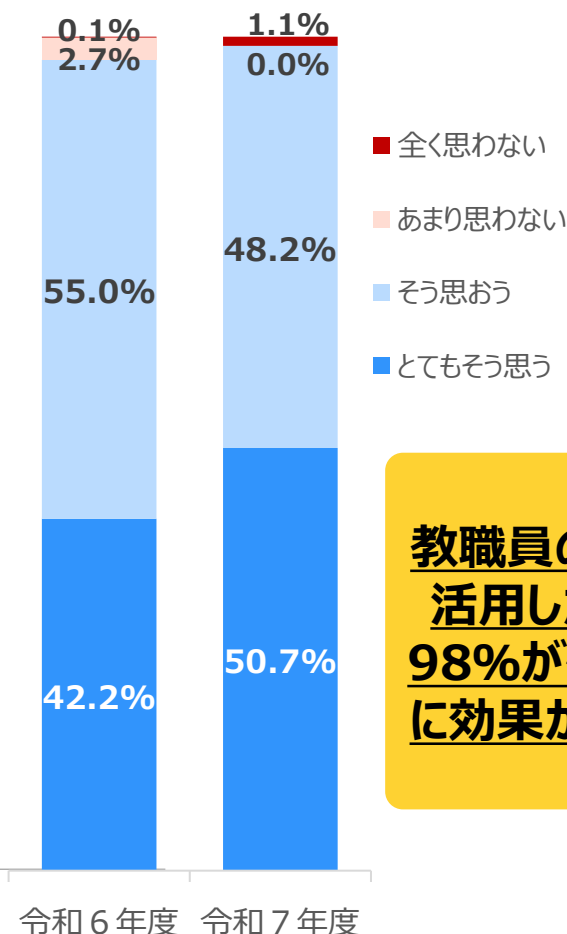
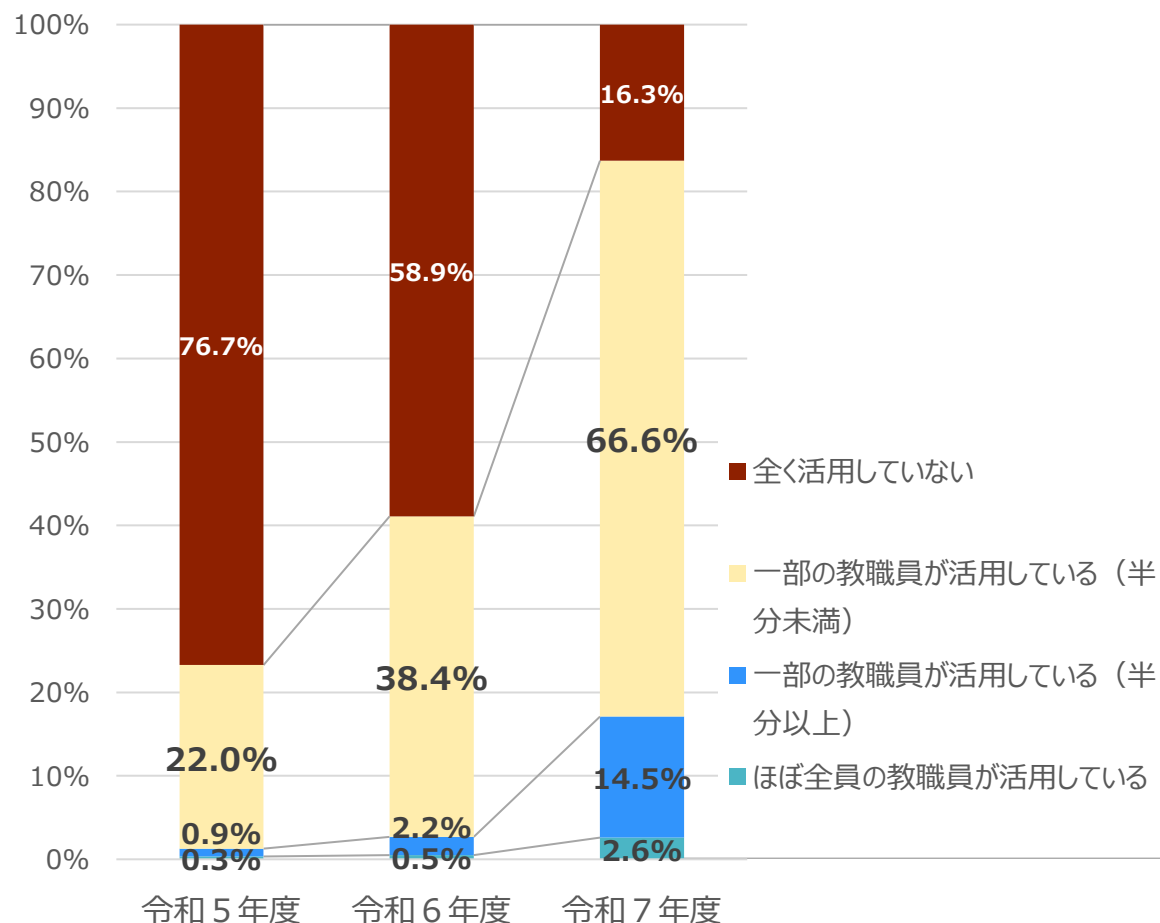
校務における生成AIの利活用の状況

- 教職員の校務における生成AIの利活用は広がりつつあるものの取組は道半ば。生成AIを活用した学校で、働き方の改善に効果があったと思う学校が 98% と非常に高い割合。

GIGAスクール構想の下での校務DXチェックリスト～学校・学校設置者の自己点検結果～[確定値]

「初等中等教育段階における生成AIの利用に関するガイドライン」に基づき生成AIを校務で活用していますか。

校務DXに取り組んだことで教職員の働き方の改善に効果があったと思うか
※一部の教職員が活用している（半分以上）ほぼ全員の教職員が活用しているという回答者への質問



**教職員の半数以上が
活用した学校のうち
98%が働き方の改善
に効果があったと実感**

生成AIパイロット校における校務での利活用の事例（令和6年度）

ガイドラインで例示している、① 児童生徒の指導に関わる業務の支援（授業準備・部活動・生徒指導等）、② 学校の運営に関わる業務の支援（教務管理・学校からの情報発信・校内研修等）、③ 外部対応への支援 等への活用例が全国の生成AIパイロット校から生まれているところ。

全国の生成AIパイロット校における取組状況（校務利用）

新潟県立国際情報高等学校 ①

生徒向けにディベートの雰囲気伝えることを目的に、探究活動のためのディベートのシナリオを生成AIを活用して作成。

かすみがうら市霞ヶ浦南小学校 ③

生成AIを活用し、学校HPの記事作成の負担を軽減。生成AI活用以前より1か月あたりの記事数が2.3倍に増加し、学校の発信を強化。

奈良市つぎか鼓阪小学校 等 ①

外国にルーツを持った子供が多く在籍しているなか、生成AIとその他の翻訳ツールを使い分けながら、学級通信や学校だよりを翻訳。

八丈町立富士中学校 ②

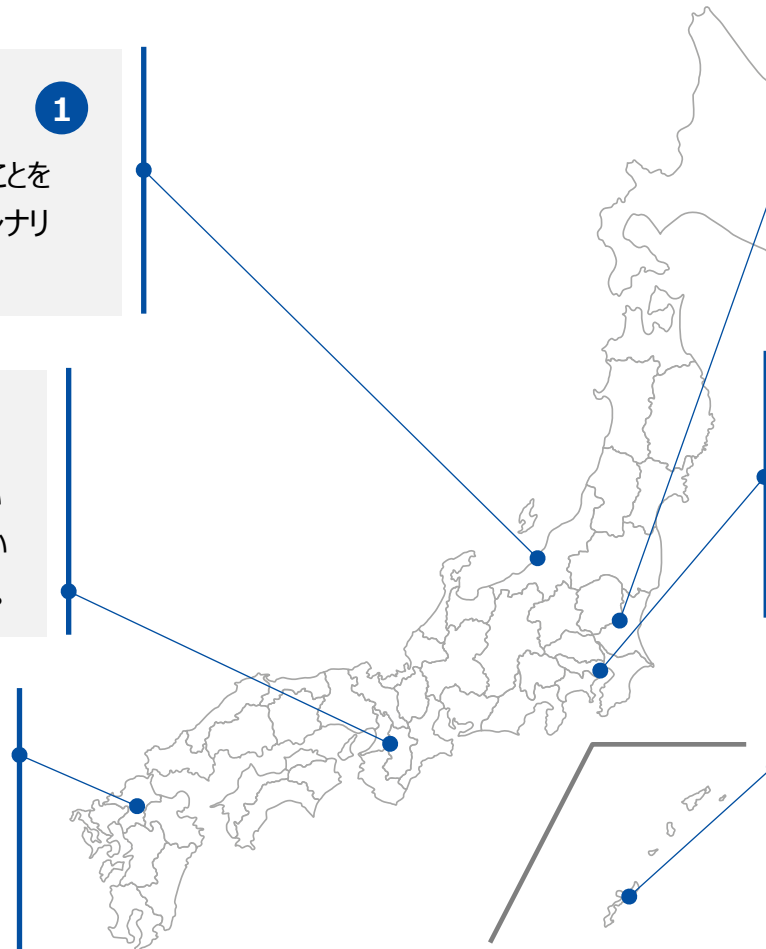
各学年の授業科目や教員の担当状況、教室の利用状況などの制約条件を考慮して、3学年2クラス分の週次時間割を生成AIを用いて作成。

苅田町立新津中学校 ①

学習指導要領・解説や指導と評価の一体化のための参考資料を参考にしたコメント生成を通じて授業指導案をブラッシュアップ。

沖縄市立諸見小学校 ①

毎時間のミニテスト作りを自動化し、日常業務に費やす時間を削減。生成AIの活用により、選択問題や記述問題などの多様な問題形式を出力。



生成AIパイロット校における学習場面での利活用の事例（令和5年度）

小学校

AIの正しい知識を身に付ける（情報モラル教育）



大阪市立高殿小学校

実施概要

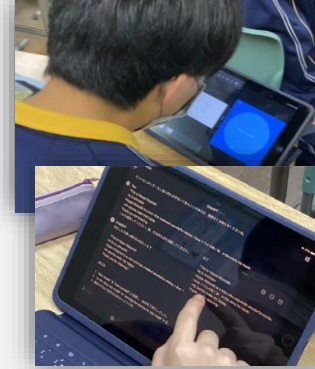
AIについての基本知識を確認。生成AIを利用して作成した記事と実際の記事を比較。今後どのようにAIを活用したいか、考えをまとめる。

児童の反応

「インターネット上の情報をすぐに信じるのではなく、様々な資料と照らし合わせたり自分の経験をもとに考えることが大切だと感じました。」

中学校

憧れの人物を英語で紹介（3年次・英語科）



宮城県岩沼市立
岩沼北中学校

実施概要

作成した英作文を生成AIに直接入力したり、音声入力したりして、訂正が必要な部分やより自然な英語表現を提案してもらう。

生徒の様子

生成AIとやり取りしたことで、より正確な英文を作り周囲に紹介できていた。音声入力をする事で、自分の発音の正しさも確認できていた。

中学校

話し合いで問題を検討する（2年次・国語科）



茨城県つくば市立
学園の森義務教育学校

実施概要

グループごとに設定した問題について話し合う活動。新たな視点や自分たちの意見に対するアドバイスを生成AIからもらい、検討を深める。

生徒の様子

生成AIからのアドバイスも、グループで話し合った内容に加えた上で再検討して、最終的な結論を出していた。

高等学校

デスクトップアプリの作成（1年次・情報科）



茨城県立
竜ヶ崎第一高等学校

実施概要

Pythonを用いたアプリの作成時にAIを活用してコードを作成。プロンプトを工夫しながら、目的に見合うコードを組み込みアプリを完成させる。

生徒の反応

「自分では書けないPythonのプログラムを書いてもらえ、それを見て勉強することもできてよかった。」
「例をすぐに出してくれて、理解しやすかった。」

生成AIパイロット校における学習場面での利活用の事例（令和6年度）

動画撮影等と組み合わせたマルチモーダルな取組や総合・高校情報等における生成AIの利活用方法が多様化。

中学校

動画から課題を把握しAIと対話（2年次・体育）



神奈川県相模原市立
中野中学校

実施概要

バスケットボールの練習風景の動画を見ながら、課題を見つけ議論を行うだけでなく、生成AIにアドバイスをもらいながら、理解を深めた。

生徒の様子

全体の動きを把握できるよう動画を撮る位置を工夫する姿が見られたとともに、AIとの対話も通じて、練習を行いながら試行錯誤する姿が見られた。

中学校

修学旅行の自主活動の行程を考える（2年次・総合）



熊本県熊本市立
桜山中学校

実施概要

修学旅行の活動内容を計画する課題解決学習において、各個人の興味関心を基に生成AIも活用しながら班での訪問場所やルートを決定的。

生徒の様子

生徒が持っている旅行先の情報が少ない状況で、AIに繰り返し聞いたり、Webページの情報を収集したりしながら、時間の短縮にもつながった。

高等学校

データベースの構築（情報科）



大分県立
情報科学高等学校

実施概要

データベースのSQLを扱う実習において、作成する構文やエラーの解説に活用。40人一斉の実習で、生成AIが各生徒にアドバイスを提供。

生徒の様子

すぐに生成AIに聞くのではなく自分自身の回答を作成してから、自らの答えを検証する場面での活用が見られた。

高等学校

生成AIを活用したシステムの設計（情報Ⅱ）



山形県立
酒田光陵高等学校

実施概要

JavaScriptでゲームの開発を行う授業。実際のゲームの動作を考え、生成AIに繰り返し指示し、何が不足するのかを考えながら理想を目指す。

生徒の反応

生成AIに日本語で指示を行うことで要件定義の思考に集中することができた。微調整が生成AIではできず、コードを学ぶ意欲にもつながった。

生成AIパイロット校における学習場面での利活用の事例（令和6年度）

中学校

英語の発表原稿の評価・改善（苅田町立新津中学校・2年次・英語科）

実施概要

修学旅行の思い出について、ALTの先生に発表する授業。グループ内で、複数の方法で改善案を検討し、修正して発表することができることをめあてとし、スピーチ原稿案を生成AIからの評価・改善点を参考にしながら修正。

実践したプロンプト

あなたは中学2年生の英語教師です。下の評価規準を元に生徒が書いた英文「ALTに修学旅行の思い出を紹介しよう」を優しい口調で評価して下さい。評価の観点：

- 内容：旅行先で体験した具体的なエピソードや、印象に残った出来事が記述されているか。
- 構成：時系列やトピックに基づいた、分かりやすい構成になっているか。
- 語彙・文法：正しい語彙・文法が使われているか。多様な表現が使われているか。
- 感情表現：自分の感想や感情が表現されているか。
- 必須文法：現在完了形を用いた英文が1つ以上入っているかコメントの指示：
- 良い点：具体的な箇所を挙げて褒める。（例："〇〇という表現が良いですね！"）
- 改善点：具体的な箇所を挙げて、改善点を指摘する。（例："〇〇の部分は、〇〇とすると、より自然な英語になります。"）
- 質問：生徒がさらに考えを深められるような質問をする。（例："〇〇について、もう少し詳しく教えてください。"）

中学校

ふりかえりフィードバック「ふり返りくん」の作成（嘉手納町立嘉手納中学校・社会科の例）

実施概要

生徒は授業後に自分の記述を入力し、生成AIからフィードバックを受ける形式。各教科に特化した、見方・考え方を教科会で検討し、プロンプトに反映。生成AIが記述内容をほめたり、具体的なアドバイスを提供。

成果・課題

具体的なアドバイス等を受けることで学習意欲が向上した。国語の授業では学級単位で文字数が大幅に増加。1時間の授業のそう振り返り時数が18330文字を超える事例も。

実践したプロンプト

- [] 中学社会の「ふり返り」の記述を分析してフィードバックします
- [] 前段は、学習した事実（情報）が記述されているか
- [] 後段は、学習した事実（情報）に対しての自分の意見、考えが記述されているか
- [] 社会の見方は、「多面的」・どのような場所にあるのか ・どのように広がっているか
- [] 社会の見方は、「かわり」・どのようなつながりがあるか ・どのような工夫があるか ・どのように協力しているのか
- [] 社会の見方は、「時間」・いつごろ始まったのか ・どのように変わってきたのか
- [] 社会の考え方は、「比べる」・ちがいがあるか比べている
- [] 社会の考え方は、「分類する」 ・いくつかの種類に分類している
- [] 社会の考え方は、「総合、関連付ける」 ・学習したことを総合する ・学習したことを関連付ける
- [] フィードバックについては、優しく具体例を挙げて解説して下さい。①学んだ内容について、②自分の考え、③改善点（よりよくするためのアドバイス）について伝えて下さい。見出しをつけて示してくれるとわかりやすいと思います。
- [] 中学校学習指導要領解説 社会編も加味してフィードバックして下さい。
- [] 学習者は14歳以上で、保護者の利用許可も取れています。

以下、対象記述データ

生成AIパイロット校における学習場面での利活用の事例（令和7年度）

中学校 社会科（第1学年）
かすみがうら市立霞ヶ浦中学校

世界の諸地域 ヨーロッパ州

EU の統合による成果と課題を多面的・多角的に考察することを通して、EU の地域的特色を大観させる。

単元の流れ（全4時間）

- ① ヨーロッパの自然・文化とEUの概要説明。
単元の課題を提示し、現時点での自分の考えを記述
- ② EU統合の是非に関する根拠（利点・欠点）を各自で収集
- ③ 収集した根拠を整理したうえで、反論や不足視点を想定して意見を修正
- ④ クラス内で意見交換を行い、多角的に考察して学びを総括

基礎的な知識を学ぶ
（AIを使わない）

導入

自らの意見を考える
（AIを使わない）

振り返り

本時の流れ

確認

根拠を自ら探す
（AIを使わない）

反論や不足点を想定
するためにAIを使う

自らの言葉で説明する
など対話的に学ぶ
（AIを使わない）

本時の流れ

AI抜きで根拠を
自ら整理する

展開

- ・ 前時で集めた根拠を整理
- ・ AIに自分の考えを投げかけ、不足している観点を指摘してもらう。

まとめ

自分の最終的な意見をワークシートに記載する

AIのみではなく
グループで学ぶ

自分の言葉で
まとめる



Q2. それはなぜですか？具体的な理由やその根拠などを交えて自分の考えを説明してください。

A2. 私は、国家間の統合は悪い事だと考える。

なぜなら、統合によって国家管理が弱くなり、治安が悪化するリスクがあるからだ。具体的に、イギリスがEUを離脱した（ブレグジット）際には、まさに治安や移民問題への懸念が大きな理由となっていたという事実がある。確かに、パスポートなしで自由に移動できることは、海外でチャンスをつかみたい若者にとっては大きなメリット（自由の拡大）となるという点はある。しかし、それについては、自由を広げすぎると、人が便利な場所に集中しすぎてしまい、かえって地域ごとの経済格差（土地の好悪格差）を拡大させてしまうと考えれば、統合のデメリットの方が大きい。結局、社会全体が弱くなってしまふ。

【まとめ】以上のことから、私は、治安や格差といった社会の安定を崩しかねない国家間の統合は悪いことだと考える。

AI活用の概要・指導上の工夫

- ・ 教師が設定したカスタムAIを生徒が「壁打ち相手」として活用。正解を教えるのではなく、自分の頭で考えるようにシステムプロンプトを設定。
- ・ AI活用時には、回答を鵜呑みにせず、根拠を教科書やネットで調べるよう指導した。

成果や課題

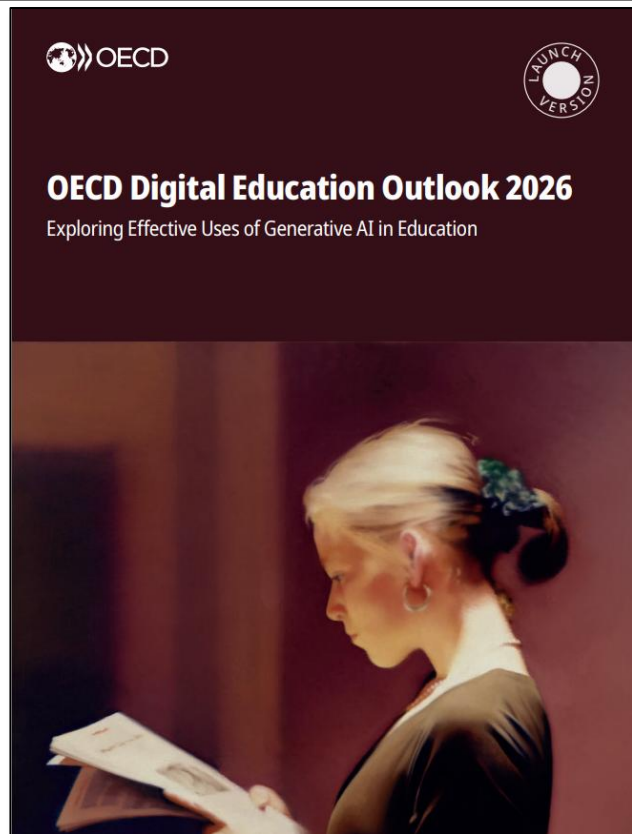
- ・ 一人一人が根拠をもって話し合いに参加し、授業後にも議論が続く様子が見られた。
- ・ 情報の真偽の確認に時間がかかり、時間内に終わらない生徒も生まれた。

本日の流れ

- 利活用ガイドライン
- 文部科学省における実証的な取組
- 最近の議論の動向やその背景

OECD Digital Education Outlook 2026

OECD「Digital Education Outlook 2026」は、教育分野における効果的な生成AIの活用に関する最新のエビデンスをまとめたOECDの基幹的報告書であり、生成AIが学習の質や教育制度全体の運営効率を高める可能性と、過度な依存による学習者の認知的な負荷の低下や教員の専門性・自律性への影響といったリスクを併せて示し、適切な政策・ガバナンスの重要性を指摘している。



2026年1月19日公表（計247頁）

Overview	Part1	Part2	Part3
概要	生徒の 学習成果の 向上	教員の 専門性の 拡張	システム ・制度管理の 改善

（出典）OECD（2026）,OECD Digital Education Outlook 2026:
Exploring Effective Uses of Generative AI in Education, OECD Digital
Education Outlook 2026 (EN) ※本資料では、主に学習場面や校務利用
を想定し、Part1・2の内容を基に資料作成者において作成

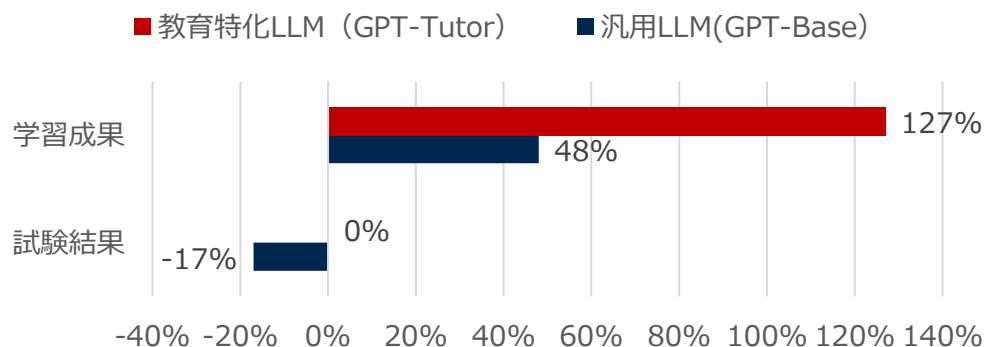
- 生成AIは世界中の教育システムに急速に導入されつつあり、より一人一人に応じた支援の拡張、フィードバックの質の向上、評価の一部自動化を可能にしている。
- 他方で、生徒や教員の主体性（エージェンシー）や学習過程を省略すること（いわゆる認知的オフロード）による学習効果を低下させるリスクも指摘されている。
- 進むべき道は技術を拒絶することではなく、教育的な意図性と方法論的な厳密さへの取組である。単に生成AIが「学生の課題遂行能力の向上」を問うのではなく、深く意味のある持続的な学習を育むためにどう活用できるかに焦点を当てる必要がある。（第2章）
- 教師が学生の主体性を促し、学生の成果物よりも思考や学習プロセスを重視することが求められる。構造化された指導戦略や評価設計といった明示的な教育モデルとを組み合わせたシステムは、汎用モデルよりも有望である。（第2章）
- 汎用的な生成AIか、教育分野特化な生成AIかに関わらず、生成AIサービスは、教師による教育的な意図のもとに学習場面の中で活用されることが重要。（第1章）
- 教育分野における生成AIの未来は、教師のタスクの自動化をいかに効率的にするかではなく、教師が専門的な判断を行使し、能力を拡大する力をいかに効果的に強化するかで決まる。（第7章）
- 政策立案者の課題は、生成AIが学習の近道（ショートカット）ではなく、学習のパートナーとなることを保証すること。（Overview）

教育分野特化に関連する学術研究の例① (OECD Digital Education Outlookより)

- 汎用モデルのみでは、資質・能力の育成やそのプロセスを毀損するリスクが学術研究でも蓄積されている。一方、AIによるフィードバックの有効性や経験の浅い教師を支える可能性も指摘されている。

学習成果と汎用AIに関する研究例 (Bastani et al., 2024)

- ・ トルコの高校生1,000名を対象とした、数学の学習場面で、①授業ノートと教科書、②汎用LLM、③教育用LLMを使用した3群に分けたランダム化比較試験で学習成果と試験結果の比較を行った学術研究。
- ・ 学習成果としては、AIを使用した②③グループは、①グループよりも正答率が大幅に高く、特に教育用AIを群で最も顕著な向上。一方、何も見ずに解答させる形式で知識を評価すると、②グループは①よりも低い成績を示した。



Bastani, H. O. Bastani, A. Sungu, H. Ge, O. Kabakcı and R. Mariman (2024), "Generative AI Can Harm Learning", The Wharton School Research Paper, Available at SSRN: <http://dx.doi.org/10.2139/ssrn.4895486>

汎用AIの活用と学習過程に関する研究例 (Chen et al.(2025))

- ・ エッセイ修正の際に「人間の専門家」に助言を求める場合と「汎用LLM」に助言を求める場合の行動パターンを比較した学術研究。
- ・ 人間の専門家と対話した学生は、「診断 → 支援要請 → 評価 → 反復 → 実施」という段階的なプロセスを踏む一方、汎用LLMを利用した学生の一部は、AIが提示した解決策をそのまま即座に実行し、「診断」「評価」「反復」という思考プロセスを頻繁に省略していた。深く考えずにAIに頼る「認知的オフローディング」が発生していると指摘。



Chen, A., M. Xiang, J. Zhou, J. Jia, J. Shang, X. Li, D. Gašević and Y. Fan (2025), "Unpacking help-seeking process through multimodal learning analytics: A comparative study of ChatGPT vs Human expert", Computers & Education, Vol 226, p. 105198, <https://doi.org/10.1016/J.COMPEDU.2024.105198>.

教育分野特化に関連する学術研究の例② (OECD Digital Education Outlookより)

- 汎用モデルのみでは、資質・能力の育成やそのプロセスを毀損するリスクが学術研究でも蓄積されている。一方、AIによるフィードバックの有効性や経験の浅い教師を支える可能性も指摘されている。

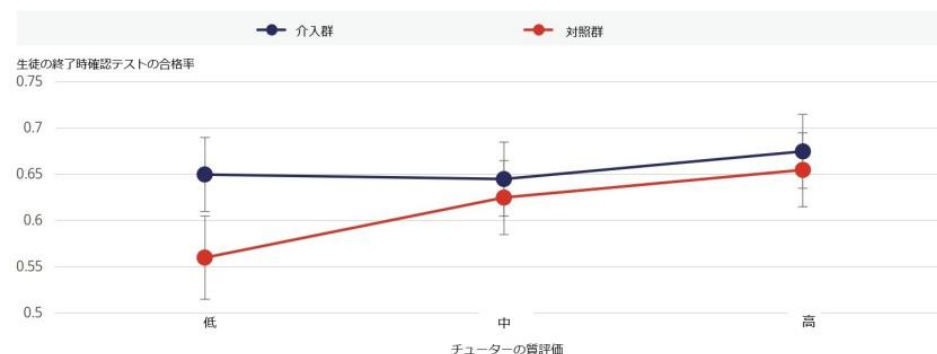
フィードバックに関する研究例 (Kaliisa et al. (2025))

- AIによるフィードバックと人間によるフィードバックを比較した41の研究を対象とするメタアナリシス。
- **AIが生成したフィードバックと人間のフィードバックは統計的に類似した学習利得をもたらすが、学習者は人間のフィードバックをより信頼性が高く意味があると認識している。**AIのスケラビリティを活用しつつ、人間のフィードバックの深く共感的かつ文脈的な特徴を保持するハイブリッドアプローチを提唱している。

Kaliisa, R., K. Misiejuk, S. López-Pernas and M. Saqr (2025), “How does artificial intelligence compare to human feedback? A meta-analysis of performance, feedback perception, and learning dispositions”, Educational Psychology, <https://doi.org/10.1080/01443410.2025.2553639>.

教職員の指導支援に関する研究例 (Demszky, D. (2026))

- スタンフォード大学のEduNLPラボが開発したTutor Copilotは、オンライン指導を行う指導者をリアルタイムで支援するAIシステム。(チューターが指導中に生徒の誤りに気づいた際などにツールを起動すると、AIが教育学的に有効な対応戦略や、編集可能な回答例を提示する。)
- **AIツールの活用により、経験の浅いチューターでは、生徒の確認テストの合格率の改善(9%)**が見られた。また、生徒に説明を促したり、思考を導くための問いかけ、正しい試みを肯定したりするなど、生徒の深い関与と理解を促進する教育戦略をより頻繁に用いるようになった。



Demszky, D. (2026), “Generative AI tools to support teachers: a conversation with Dorottya Demzsky”, in OECD(ed.), OECD Digital Education Outlook 2026: Exploring Effective Uses of Generative AI in Education, OECD Publishing, Paris, <https://doi.org/10.1787/062a7394-en>.

AIに関するリスクや懸念に関する学術研究の例

- AIはその有用性が多く指摘される一方、ディープフェイク等を含む犯罪への悪用や依存性、認知過程に与える影響等も指摘されている状況。これらの点は現下に学術的な知見が積み重なりつつある状況であり、技術の進展に応じて判断する必要。

過度な依存やバイアスに関するリスク

- こどもの権利の保護に向けUNICEFが2025年12月に公表・改訂した指針では、こどもがAIを擬人化することやチャットボットに対して感情的な依存（疑似的な社会的関係）を築いてしまうリスク、AIに愛着を持つことで個人情報を開示したり、AIによる操作や搾取に対して無防備になるリスクを指摘。

UNICEF(2025) Guidance on AI and Children, Updated guidance for governments and businesses to create AI policies and systems that uphold children's rights より

- アメリカ心理学会の専門家パネルは、AIにより依存や既存のバイアスをさらに強化する可能性を指摘。
特に、汎用的な消費者向けのモデルはユーザーに好意的に返答するよう訓練をされており、それにより確証バイアスや不適応な信念を強化することやユーザーの既存の信念を増幅・強固にするエコーチェンバーを生成するリスクを指摘。また、偏ったデータで訓練されたモデルは、社会的に弱い立場にある集団に対して、差別的または有害な助言を生成するリスクを指摘。

American Psychological Association (2025) Use of generative AI chatbots and wellness applications for mental health, “4. Protect users from misrepresentation, misinformation, algorithmic bias, and illusory effectiveness” より

批判的思考やメタ認知等の学習過程への影響

- LLMを用いたエッセイ執筆が学習・脳活動・当事者意識に与える影響を、脳科学的に分析した研究。LLMは利便性を提供する一方で、認知的負荷の低下、記憶・理解の弱化、主体性の低下といった教育上の潜在的リスクを伴う可能性を示唆。認知負債等のLLM依存の長期的影響についても検証が必要と指摘。

Kosyama et al. (2025) Your Brain on ChatGPT: Accumulation of Cognitive Debt when Using an AI Assistant for Essay Writing Task

- AIツールの使用と批判的思考スキルの関係を調査し、認知的オフローディング（認知負荷の外部化）が媒介要因として機能するかに焦点を当てた研究。AIツールの頻繁な使用と批判的思考能力との間に有意な負の相関があり、若年層はAIツールへの依存度が高く、批判的思考スコアが低い傾向。

Gerlich, M. (2025). AI Tools in Society: Impacts on Cognitive Offloading and the Future of Critical Thinking. *Societies*, 15(1), 6.

- 生成AIの利用が論理的課題における成績と自己評価（メタ認知的判断）にどのような影響を与えるかを、大規模実験で検証した研究。AIは成績を向上させる一方、自己評価の過大化を招き、メタ認知の正確性を低下させることが示された。

Daniela Fernandes et al. (2026) AI makes you smarter but none the wiser: The disconnect between performance and metacognition, *Computers in Human Behavior*,

生成AIパイロット校の実践事例に対する有識者コメントを ベースにした児童生徒の学習場面における懸念の例①

観点	想定される活用の事例（イメージ）	事例に対する有識者コメント	ガイドラインの記載（p7,17等）
教育目的との整合	中3国語「PR文を書く」： AIに文章構成の並べ替えや文の修正を求め、単元で育成したい「構成を工夫する力」をAIが代替してしまっている。	単元の目標や学習指導要領のねらいとAI活用の関係が十分に説明されておらず、「なぜこの学習でAIを使うのか」「どのような教科の学びにつながるのか」が読み取りにくい	児童生徒の学びにおいては、<u>学習指導要領に示す資質・能力の育成に寄与するか、教育活動の目的達成に効果的かを吟味</u>する。
学習者の主体性の確保	小6総合「しおり作り」： 児童が自分でしおりの内容を考える前に、AIにアイデアを求めている。	- 児童生徒の発想・試行・表現の過程が省略されているように見える。 - AIの提案を受けて何を採用し、何を採用しなかったのかなど、学習者自身の判断が読み取りにくい	自己の判断や考えが重要であることを十分に認識させられるか、適正な評価の阻害や不正行為に繋がらないか、生成AIの出力を基に深い意味理解を促し、思考力を高める使い方をできるかなど、<u>発達の段階や各教科等における学習の状況等を含む児童生徒の実態を踏まえ、そうした教育活動が可能であるかどうかの見極めが重要</u>。

生成AIパイロット校の実践事例に対する有識者コメントを ベースにした児童生徒の学習場面における懸念の例②

観点	想定される活用の事例（イメージ）	事例に対する有識者コメント	ガイドラインの記載（p7,17等）
教師による 学習活動への位置付け	小6音楽「音楽の創作」 ： AI作品と自身の作品の比較後に、児童自身の旋律を再検討・修正する活動までつながっていない	- 単元や授業のどの場面で、どのような意図をもってAIを活用したのかが読み取りにくい。 - AI活用後に、交流・比較・再検討・振り返りを通して児童生徒の考えがどう変化したのかの説明が不足している	教育は、教師と児童生徒との人格的な触れ合いを通じて行われるものであり、 <u>適切な指導計画や学習環境の設定、丁寧な見取りと支援といった、学びの専門職としての教師の役割は、生成AIが社会インフラの一部となる時代において、より重要なものになる。</u>
AIの役割・ 範囲の制御	中3国語「意見文を書く」 ： AIが複数の改善点を提示し、生徒が最も伝えたい主張よりもAIの助言に沿って修正してしまっている	- AIが学習者の思考を支援するのではなく、作業や判断を代替しているように見える。 - 本来児童生徒が考えるべき内容までAIが担っていないか、役割や出力範囲を調整する必要がある	生成AIを利活用することが目的であってはならない。 <u>そのためには、適切な課題設定と指示文（プロンプト）により自らの求める成果物につながる出力をさせ、その真偽や適切性を的確に判断できることが前提となる。</u>
AI出力の 吟味・検証	高1情報Ⅰ「データの分析」 ： AIが示した解決策を、データや分析の前提と照合せずに利用している活用に見える	- AIの回答を正しいものとして受け入れ、誤り・偏り・不十分な説明に気づかないまま利用しているように見える。 「確認させた」と書いてあるだけで、何と照合し、どのように確かめたのかが読み取りにくい	教師は、 <u>自身が十分にハルシネーションやバイアス等の生成AIの特徴を理解した上で、児童生徒がそのような生成AIの特徴に留意して利活用できているかを確認する必要がある。</u>

生成AIについて学校教員が学ぶことのできる機会の提供について

- Webサイトやイベントなどを通じて教員向けに学習機会を提供（イベントの様子は動画でアーカイブ化）
- 教職員の学習可能時間や興味関心に応じて学習できるよう、比較的短い動画コンテンツなども整備。

Webサイトを通じた研修機会の提供



第1回「学校における生成AIの適切な使い方」（令和7年）

令和7年度 掲載動画タイトル

- 「生成AIの基礎と教育における活用可能性」（52分）
－東京大学大学院工学系研究科准教授 吉田 墨 氏
- 「生成AIを活用するための情報活用能力の基礎」（55分）
－信州大学教育学部准教授 佐藤和紀 氏
- 「学校における生成AIの適切な使い方」（15分）
－東京大学大学院工学系研究科准教授 吉田 墨 氏
- 「利用規約を確認する観点と運用上の留意点」（20分）
－西村あさひ法律事務所・外国法共同事業弁護士 福岡 真之介 氏

イベントを通じた研修機会の提供

令和7年度

Generative AI

生成AIの利用に関する 冬季公開学習会

生成AIパイロット校の成果を起点に、パネル&ポスターで
学校現場における生成AI活用の現在地を学びあい、
“見る・語る・持ち帰る”ことができる公開学習会を開催します。

開催日
2026 2月2日 12:30～16:30

会場
東京ビッグサイト
会議棟1F レセプションホール
〒135-0063 東京都江東区有明3丁目11-1
<https://www.bigsight.jp/visitor/access/>

開催形式 / 現地開催

PROGRAM

12:30	オープニング	文部科学省初等中等教育局 学校情報基盤・教材課長
13:00	学校における生成AI活用の現在地/今後の展望について	寺島 史朗 氏
13:00	パネルディスカッション	ファシリテーター 徳州大学 教育学部 准教授
13:50	生成AIとともに学ぶ私たちに必要なこと	佐藤 和紀 氏
14:00	ポスターセッション(対話型・学び合い)	
16:10	パイロット校の実践を担当者で直接対話 － 活用の工夫・運用ポイント・再現ポイントをその場で確認 －	
16:10	講評・クロージング	東京学芸大学 教育学部 教授
16:30		高橋 純 氏

参加費
無料(事前申込要)

事前申込
<https://www.mext.go.jp/zyoukatsu/ai/#event>
「参加する」からお申込みください。

学校現場における生成AIの利活用に関する調査研究事業事務局 Email: ai_info@nttts.co.jp

生成AIパイロット校の実践事例等や有識者による学校教育におけるAI利活用について留意すべきことについて、一般公開するとともに、アーカイブ動画として公開

令和8年度開催予定の生成AI関係の対面イベント

夏季公開学習会

Generative AI

令和8年度 教育×生成AIシンポジウム

生成AI時代、学びはどこへ向かうのか

開催日 2026 7月30日(木) 12:30～16:20

会場 東京大学 本郷キャンパス 安田講堂
https://www.u-tokyo.ac.jp/ja/about/campus-guide/map01_02.html

形式: 現地開催 ● 使用言語: 日本語・英語(同時通訳あり)

事前申込 <https://84ea20da.form.kintoneapp.com/public/ai-2026>

参加無料 (先着順)

実施済み

コンセプト
 本シンポジウムは、生成AIの教育利用に関する国際的な最新の動向や先進事例、研究知見を共有するとともに、学校関係者及び保護者が生成AIの可能性とリスクについて理解を深めることを目的とします。また、AI技術の進展を踏まえ、今後の社会を生きる児童生徒に求められる情報活用能力をはじめとする資質・能力の育成や、教育の質の向上に資する実践性を生かした学びの実現に向けた教育の在り方について考え、生成AIの適切な活用方法について検討する機会とします。

スピーカー(予定)

OECD 教育・スキル・未来 (Director for Education and Skills) アンドレアス・シュライヒャー氏 Andreas Schleicher	公益法人みんなのコード 代表理事 杉之原 明子氏
東京学芸大学 副学長 / 教職大学院 教授 堀田 龍也氏	能美市立寺井中学校 校長 亀田 香利氏
東京大学大学院工学系研究科 准教授 吉田 壘氏	信州大学学術研究院教育学系 准教授 佐藤 和紀氏
	哲学者・株式会社 baton 田村 正資氏

プログラム(予定)

12:30～13:00	開会挨拶(文部科学省)・オープニングセッション
13:00～13:50	基調講演 生成AIとともに広がる学びの未来 ～OECDの視点と日本への期待～ (英) / OECD 教育・スキル・未来 (Director for Education and Skills) アンドレアス・シュライヒャー氏 Andreas Schleicher
13:50～14:15	会場リフレクシオン
14:35～15:35	パネルディスカッション テーマ: 生成AIがもたらす学びの再構築とその可能性 文部科学省と日本OECD共同研究(※)のコーディネーションパート Andreas Schleicher アンドレアス・シュライヒャー氏 亀田 香利氏 杉之原 明子氏 堀田 龍也氏 吉田 壘氏
15:35～16:10	会場リフレクシオン/まとめ
16:10～16:20	全体講評 / 信州大学学術研究院教育学系 准教授 佐藤 和紀氏

(※) 日本OECD 共同研究とは
 日本OECD共同研究とは、OECDの“Future of Education and Skills 2040 (E2040)”プロジェクトの国際的な議論と連携しながら、2040年の望ましい教育と社会のあり方を、日本の学校・地域・研究・政策・実践の現場から共に考え、見だし、つなぎ、発信していく共同研究・共創の枠組みです。子ども、若者も大人も、未来の受け手ではなく、今をしながら未来をつくる主体として位置づけます。そして、各地の実践を丁寧に見だし、意味づけ、つなぎ直し、国内外へ発信していくことで、教育を起点に、よりよい未来を社会へ広げていきます。

生成AIの活用を通じた教育課題の解決に向けた教育DXの加速事業 コンソーシアム事務局
 Email: ai_info@nttexc.co.jp

全国キャラバン (9月～12月)

文部科学省主催 Generative AI

教育×生成AI 全国キャラバン2026

～研修パッケージを体験し、地域の推進ネットワークを築く～

生成AIの急速な発展を踏まえ、学校現場における適切な利活用を推進するため、文部科学省では全国6都府県で「教育×生成AI 全国キャラバン」を開催します。研修パッケージの紹介や体験、参加者同士の意見交換を通じて、地域や学校における推進のヒントを持ち帰る機会とします。

開催地

大阪 11月13日(金) 13:30～16:30 難波御堂筋ホール https://nanbamiidoujinhall.com/access/	札幌 9月25日(金) 13:30～16:30 北海道教育会館 https://h-kyoikukaikan.com/
岡山 11月27日(金) 13:30～16:30 岡山国際交流センター https://www.opie.or.jp/oicenter/access.html	仙台 10月16日(金) 13:30～16:30 トラストシティカンファレンス仙台 https://www.tcc-ai-gaishitsu.com/tcc-s/access.html
福岡 12月18日(金) 13:30～16:30 リファレンス大博多ビル https://re-rental.com/hakata/access/	東京 11月6日(金) 13:30～16:30 ビジョンセンター新橋 https://www.visioncenter.jp/shimbashi/access/

タイムスケジュール(予定)

13:30～13:45	オープニング
13:45～14:15	研修パッケージ (紹介・解説)
14:15～14:45	研修パッケージ (体験)
15:00～16:10	ネットワーキング (ワークショップ・体験)
16:10～16:30	クロージング

参加無料 (先着順)

事前申込 ※参加申込の受付は現在準備中です。申込開始時期や申込方法については、あらためてご案内いたします。

生成AIの活用を通じた教育課題の解決に向けた教育DXの加速事業 コンソーシアム事務局
 Email: ai_info@nttexc.co.jp

安全かつ主体的にAIを活用できる学習環境の構築に向けた取組の方向性

現状・課題

ルールが明確でなく、 リスクを恐れ適切な利活用が広がらない

- ・ ガイドラインが原則論に留まり、具体性が乏しい。AX時代に必要な情報活用能力の抜本的向上に対応する必要。
- ・ AIのリスクを過度に感じていたり、有効な活用方法が浸透していない。



目指す方向性（やるべきこと）

① ガイドラインの改訂と研修を通じた周知広報

- ・ AX時代に必要な情報活用能力の考え方を踏まえ、ガイドラインで効果的な場面と活用すべきでない場面を具体例を明示
- ・ リスクを踏まえた研修機会を拡充し教職員のAI活用を促進



汎用AIでは学習や教師の専門性を支えられない



② 教育分野に特化したAIの実証研究



偽誤情報の出力リスクなどを、防ぐためのデータがない



③ 基盤的なデータの整備とAIのリスク評価



校務系の重要性の高いデータを活用できない



④ 学校現場で安全にAIを使えるインフラ整備



初等中等教育における生成AIの利活用に関するガイドラインの 改定（ver2.1）に向けて

No	項目	現行ページ	具体的なイメージ
1	技術の進展に関する現状認識・ リスク関連の学術研究、国際的な議論	第1章 p3・5	・ エージェントAI等の技術動向 ・ 学術研究の動向やOECD・諸外国等での国際的な議論
2	教師の役割	第2章(1) P7	・ 教師の役割と教師（AI）が担うべき業務
3	AIサービスの提供者に求められる視点	第2章(1) P8	・ 教育分野特有のリスク低減に向けた事業者の対応事項（具体の部分は関係機関とも連携）
4	情報活用能力	第2章(2) p8・9	・ 情報活用能力の抜本的向上 ・ 小中高段階におけるAIの学習
5	学習活動で利活用する場面	第3章-2 p16・17・20	・ 過度な学習過程のショートカットへの対応（認知的オフロードの発生による深い学びを阻害している例等） ・ AIに関連した学習課題の提示や評価に関する考え方
6	教職員の校務場面における活用	第3章-1 p13・14	・ AIの活用により効率化・高度化できる校務の具体例

最後に・・・

(26.08.04 教育課程企画特別部会における議論の内容)

(2) 「深い学び」の実現と「確かな知識」の習得

- AIがどのような質問にも応じたり、大量の情報を効率的に整理・分析したり、問題の解決策も提案できるようになっていることから、知識を習得する重要性が下がってきたとの指摘や、児童生徒が知識の重要性を実感しにくいのではないかと指摘も出てきている。このため、「深い学び」の実現について具体的に考えていくに当たり、AI時代に人間が知識を持つ意義を改めて整理しておく必要がある。
- 第1に、AIがどれだけ効率的に情報を整理・分析してくれたとしても、AIを駆動させるための指示や問は人間が出す必要がある。それらは当該分野における一定の知識なしには生み出すことができない。いわゆる「壁打ち」にしても、AIが出力したアイデアを人間が理解できなければ具現化されることはない。
- 第2に、AIが処理した大量の情報の正誤や妥当性を見極めるためには、当該分野における一定の知識の基盤が必要である。そして、AIが出力した提案を参考にしつつも、責任を持って判断し、意思決定するのは、人間こそが果たすべき役割であり、そのためにも社会的適合性や倫理面も含む豊かな知識が必要である。
- 第3に、メディアや報道がAIのアルゴリズムの影響を受けつつあり、社会の分断の危険性も指摘される中、自らの人生を舵取りするとともに、社会の創り手としての責任を果たすためには、AIの基本的な仕組みや人間の認知に与える影響、メディアリテラシーを含む知識の基盤が重要となる。
- 第4に、こうした知識なしには人間は責任を持ってAIを制御したり、管理したり、発展させることができなくなってしまう。もとより、先人が営々と積み重ねてきた「知の体系」を発達段階を踏まえて次世代に継承し、更なる発展を期することは学校教育の不易である。

(2) 「深い学び」の実現と「確かな知識」の習得

- こうしたことを踏まれば、AIの発展により、知識そのものの価値が下がったというのは適当ではなく、意味理解を伴わない丸暗記や、定型的な知識の当てはめ、知識の量だけを過度に競うような評価の在り方等の価値が一層低下したと捉えるべきである。
- むしろ、知識を意味理解や外化を伴う形で効果的に身に付け、知識と知識を繋げて頭の中で構造化したり、共通点や原理・原則を見いだして一般化したりする過程で好奇心や問題意識を育み、社会や世界を解像度高く理解し、様々な現実の課題の解決に資する形に磨き上げていくこと、すなわち「確かな知識」として習得し、思考・判断・表現等に活用したり探究的な学びに繋げたりしていくことはこれまで以上に必要になる。換言すれば、「確かな知識」とは、こうした過程による認知的な努力を通じて身体化（記号接地）された知識でもある。
- したがって、いずれの教科等においても、児童生徒が学習の過程を通して個別の知識を学びながら、それらが思考・判断・表現の過程で既得の知識と関連付けられ、各教科等で扱う主要な概念を深く理解し、他の学習や生活の場面でも活用できるような「確かな知識」として習得されることが重要である。
- 後述の「統合的な理解・総合的な発揮」による構造化は、まさにこれをよりよく実現するために構想されたものであり、その過程で、個別の知識として概念的知識のみならず事実に知識も含めて習得され、思考・判断・表現により既得の知識と関連付けられることで、より深まって定着し、「深い学び」が実現していくことになる。

